

律令体制のゆきづまりとともに、莊園は一層発達し、地方では武士が台頭する。武家政権の鎌倉時代には春日神社領の山道加納莊（住吉地方）、南北朝には得井時枝莊（東灘西部）があり、区の東方には葦屋莊が形成されていた。鎌倉時代の水田址が御影町郡家や本庄町で調査された。

一方、この地方は古くから京と太宰府を結ぶ山陽道に沿っており、都にも近くて多くの文人が訪れて歌に詠み文を書いた。また、武士たちはここで戦った。一の谷合戦の際には、源範頼に率いられた源氏の軍勢が雀の松原や御影に陣を張った。また建武中興の後には不満を抱いた武士を擁して九州から攻め上ってくる足利尊氏を伐つために、楠木正成らが、ここを通って湊川に向った。そして湊川の敗戦の後、新田義貞は山陽道を京へと敗走する途中、東明の処女塚上で足利方と一戦を交えた。また征夷大將軍となつて室町幕府を開いたあと、尊氏は弟の直義と対立を始めたが、兩軍は打出・御影の浜辺で合戦をした（観応の擾乱）。このような戦乱の中で、この地方に土豪の城砦として平野城や山路城が築かれている。

住吉川など東灘の河川の洪水の伝承も、この時代から伝わり始める。戦乱や天災にわずらわされながら、農民たちの結束は強まり、生活の場としての郷村が確立していく。戦国時代の末に東灘には、山ぞいに東から、森・中野・小路・北畑・田辺・岡本・野寄・住吉・郡家、また海岸には東から深江・青木・西青木・魚崎・御影・東明、そしてその中間に東から田中・横屋・石屋などの村々がほほできあがっていた。その頃、織田信長の軍が花隈城攻撃のために山陽道を通過した。戦乱を鎮めたあと、豊臣秀吉はこれらの村を検地し石盛を行った。天正頃の東灘は、ほぼ全域が豊臣家の直轄地だった。

雀すずめの松まつ原ばら

魚崎一帯の浜辺の松林は、古来、雀の松原の名でよばれる景勝地だった。早くは鎌倉時代のはじめ『源平盛衰記』の中に、このあたりの山陽道沿いの名所として、処女塚とともにこの名が記されている。

魚崎駅の西に二百m、阪神電車線の北の公園に二つの石碑がある。



「雀の松原」古跡

竹ならぬかけも雀のやりとりは、いつ名にしめし松はらの跡 中納言公尹卿詠

雀松原遺址 杖とめて千代の古塚とへよかし こ
こや昔のす、め松原」と刻んである。住吉川の西には
西松原・上松原・下松原の字名あざながあり、昔の松林がし
のばれるが、今ではこのあたり数株の老い松が点在す
るだけである。

古代には、このあたりはササイの里とよばれていた。
『和名抄』は摂津国兔原郡佐才郷と記しており、『新撰
姓氏録』所収の豪族雀部朝臣ささべのいた地だと思われる。
おそらく、このササイの地名に「雀ささ（鳥の名）」の字
を当てていたのが鎌倉時代までに「すずめ」と読み変
えられ、雀の松原などの地名ができたのだろう。
西国街道からこの松原への道標石が、環境局東灘事
業所正門わきに残っている。



雀の松原道標石

雀の松原の戦い

街道ぞいの松林は、また戦時に陣地ともなった。源平の争乱・南北朝の動乱・戦国の乱世の各時代に、こは戦場として記録されている。

福原・兵庫に捲土重来して陣取った平家を伐つため、源範頼に率いられた源氏の軍勢は、京より下って寿永三年（一一八四）二月「五日の暮がたに、源氏昆陽野をたて、やうやう生田の森に責ちかづく。雀の松原・御影の松・昆陽野の方をみわたせば、源氏手々に陣をとて、遠火をたく。ふけゆくままにながむれば、晴れたる空の星の如し。」と『平家物語』は記している。

それから二百年のち。室町幕府の成立後、弟の足利直義と争った尊氏たちの陣が、ここに張られた。観応二年（一三五二）二月十七日、打出・越水・鷺林寺（芦屋・西宮の山手一带）の直義軍を攻撃しようと、尊氏は二万の大軍を率いて御影の浜に布陣した。この時尊氏の部下の葉師寺次郎左衛門尉公義は、大軍で統制のとれぬ味方の不利を悟って、非常の時にそなえて「一族手勢二百余騎、雀之松原の木陰に控え」（『太平記』）させていた。はたして尊氏方は敗れ、縊くずれとなつ

て西方に逃げ、須磨の松岡城（須磨区大手町勝福寺付近）に入った。敗軍の中で公義の兵のみは、赤い絹の目じるしをつけて敢闘したという。

また二百年ほどのち、謀叛を起した伊丹城の荒木村重に対して、織田信長は天正六年（一五七八）霜月のすえ、「滝川左近・惟住五郎左衛門兩人差遣はされ、西宮・いばら住吉・あし屋の里・雀が松原・三陰の宿・滝山・生田森陣を取り、御敵荒木志摩守鼻熊に楯籠り候」と『信長公記』が伝えている。

福原京ちかくの名所

（治承四年八月十日、左大将実定は）浮世の旅の思出に、名所名所を問ひ見てぞ上られける。千代に変わぬ翠は、雀の松原、御影の松、雲井にさらす布引は、我朝第二の瀧とかや。業平の中将のかの瀧に、星か川辺の螢かと、浦路遙かに詠めけん、いづくなるらんおほつかな。求塚と言へるは、恋ゆゑ命を失ひし、二人の夫の墓とかや。猪名の湊の曙に、霧立ちこむる昆陽の松

『源平盛衰記』より



住吉川の河口

伝説の雀合戦すずめがっせん

むかし雀松原には大勢の雀が住んでいた。そこへ三年に一度ほど山奥の丹波たんぱから雀の大軍がおしよせて、ここの雀と大合戦をしたという。十数日つづくこの雀合戦を観ようと、たくさんの人々が訪れた。そのうちある村人が、艶たおれた雀をひろい集めて見物人のために合戦のあいだ「雀茶屋」と称する焼鳥の店を開いた。これがまた灘名物となつて、年中開店し、また松原には旅人のための「雀宿」という宿屋もできたということである。

多くの旅人が訪れ、歌もたくさん残っているが、貞松の「千代千代となけども鶴の声でなし、雀松原百になるまで」もよく知られた狂歌である。

小路と八幡宮神社 しやうじ
 本山北町五丁目二
 市バス本山北町二丁目

旧小路村の氏神が、字白井内にある。土地の旧家白井氏は、源頼光の四天王の一人・碓井貞光の子孫だと伝え、頼光からこのあたりを莊園として与えられて邸を設けたのが、この白井内の地だという。神社境内に「元禄十六癸未年正月十五日 本庄 庄司村中」と刻まれた灯籠があり、小路の村名は莊園の管理者「莊司」から起ったのだとも説かれる。

あたりは竹やぶが多かった。へ小路藪の中の在所やけんど 娘そだちのよい所 などと俚謡に唄われた。



小路の八幡宮神社

小山田高家の碑

御影塚町二丁目十
処女塚公園内

延元元年（一三三六）、湊川の戦いに敗れた新田義貞は、生田の森から東に敗走して東明へとさしかかった。しかし、追手は近づき、義貞の馬は七本の矢を身に受けて、ついに斃れてしまった。今はこれまでと、義貞は馬を降り、処女塚に登って敵を防いでいた。その窮状をはるかに眺めた小山田太郎高家は、これまでの義貞の恩義を思い出して、塚に駆け寄り、おのが馬に義貞をのせて、自分は塚上に留って敵を防いで、義貞を東に逃れさせた。しかし、味方の敗色はぬぐうすべもなく、ついに高家は、この処女塚の上で討たれてしまった。『太平記』の描くこの武勇を記念して、処女塚公園内には弘化三年（一八四六）に書かれた高家戦跡の碑がある。



小山田高家の碑（処女塚公園内）

若宮八幡宮神社

住吉山手五丁目三
市バス白鶴美術館前

赤塚山すその森の中に、応神天皇をまつる若宮八幡宮神社がある。『撰津名所図会』には、本住吉神社より「北十町許はちにあり、六甲山の麓なり」と記している。

このあたり山田地方は、本住吉神社周辺の住吉本村の出村として、応仁頃（一四七〇頃）から開拓がすすんだと伝えられ、この神社もその頃勧請されたものと思われる。



若宮八幡神社

正寿寺

深江北町三丁目七
阪神深江駅

深江北町四丁目から本庄町三丁目の一部に、薬王寺という字名あざが残っている。そこに中世にあった寺にちなむ地名と伝えており、その薬王寺の後身が、今の正寿寺だという。

伝説によると、そのあたりに中世には大日如来をまつる薬王寺を中心とする小さな集落があり、その東方にも、土地の豪族の永井屋敷のまわりに何軒かの民家があった。この二集落が合併して深江村ができたという。

しかし文明十三年（一四八一）薬王寺住職観空は、蓮如に帰依して浄土真宗に改宗し、寺を延寿寺と改名した。本尊も阿弥陀如来となった。のち、寛永十年（一六三三）土地の永井三左衛門が出家、空照と号して寺を継ぎ、字薬王寺の地から現在地に移して永井山正寿寺と改称したと寺伝にいう。

平成七年（一九九五）の震災で本殿は倒壊した。

現在の正寿寺



深田池公園

御影山手一丁目
阪急御影駅

阪急御影駅のすぐ北に、農村時代の溜池であった深田池を中心にした公園がある。平成二年（一九九〇）度に全面改修され、春の桜花や夏の深い緑にかこまれた美しい自然の中で、憩いの一時を楽しむ人も多い。この池のすぐ南に浅田池、東南に村田池という溜池もあったがそれは埋め立てられて今はない。

付近には静かな緑の中の住宅地をぬって、格好の散歩道がある。深田池から東北へ、白鶴美術館へぬける道。また池から西へ御影北小学校の裏を通る道は、途中に風雅な竹の光悦寺垣がつづいていたり、大きな御影石の石垣に囲まれていたりして、特に春から初夏の木もれ陽はすばらしい。



深田池付近の道

深田池公園



平野城趾

阪急御影駅の南方に城以前の字名があり、その西を南北に大手筋と呼ばれる道路が通っている。これらは『撰津志』が「御影村城 観応中平野氏拠焉」と言い、いわゆる平野城の名残りとされる。土地の平野氏の古記によると、赤松円心の家臣だった祖先の平野忠勝の居城があったと言い、忠勝は観応の戦いに敗れた後、御影にもどって農業に従事し、平野家の祖となったと伝える。中世のその平野城は、他に記録も無く、付近の地形も宅地化によって旧態は大きくそこなわれていたので、城砦の姿を復元するのは極めて困難。しかし、地名のいくつかから、幾分そのおもかげがしのばれる。城之前と上之山の間に岸本という字があり、大手筋はここから南へのびている。岸本の西に平野の字があり、平野の南、大手筋の西に滝ケ鼻の字が認められる。タケガハナは竹ノ花とも書かれ各地にある。柳田国男は『地名の研究』で、街道などから城館をかくすために植えられた竹藪の名残りの地名だと説いている。

ところで、阪急御影駅の北方に九重ヶ坂の地名が

あった。駅を北に出ると、緑こい山のすそに深田池があって、池のほとりから赤塚山に登る自動車の走る急な坂道がある。このあたりが、住吉町九重ヶ坂だ。クエガサカと読む。

このクエは、くずれるという意味の古語「崩え」で、赤塚山から南に伸びた台地の東縁に欠壊した崖があったことを示している。その南下の深田池かたの名は、もとはそこがフケ（湿地）で、フケ田（泥深い田）になっていた所へ築かれた溜池らしいことを教えてくれる。この池の南西にも、今は無いが同様の溜池があつて、深田池に対して浅田池と呼ばれていた。崖（クエ）のとぎれた南の低地に湿地（フケ）が広がっていたのであろう。

こう見ると、平野城は、上之山・岸本・平野あたりにあつて、西は石屋川とその支流の新田川で守られており、南に竹藪を繁らせて館をかくしていた。この城砦の東の防衛線として、御影駅の北の、フケ（湿地）とクエ（崖）が利用されていたわけである。

阪急御影駅北側の広場に御影城趾の碑がある。

中勝寺 御影郡家二丁目四
阪急御影駅

この寺は、文安年間（十五世紀半）に創建され、初め夢境庵といっていた。

永正二年（一五〇五）平野秀満が夢境庵を祖先の備前守忠勝の菩提寺とし、平野山忠勝寺と改めた。忠勝寺は寛永十六年（一六三九）に信誉和尚の時、浄土宗の寺となり、明和四年（一七六七）に火災にあった。その後、再建された時に平等山中勝寺と改称した。現在では浄土宗知恩院末で、阿弥陀如来を本尊とする。

境内には、市の保護樹木指定のいちじょうの木がある。

阪神・淡路大震災で本殿は倒壊したが、平成九年（一九九七）、再建された。

境内の墓地に、平野家の墓所が設けられている。



中勝寺

山路の城あと

『撰津志』には「山路城 在三田中村二観応年間 赤松範頭拠此」とある。南北朝時代の赤松氏ゆかりの城砦のようだが詳細はわからない。城主も『播州名所巡覧図絵』では、赤松信濃判官彦五郎則実となっており史料によって赤松範頭とも則実とも記されている。江戸時代には城跡もあったようだが、鉄道建設の際に崩されたとみえ、地形も残っていない。的場・池の内などの古地名から考えると、現在の手水公園から岡本三丁目あたりが、その故地と思われる。『古城記』には「山路城、貞治元年、和田、楠等、只一軍に当国の敵を追落して勝に乗ると雖も、赤松彦五郎等、此城に籠て待てる間、兵庫湊川を焼払ふて引返しける」と記している。